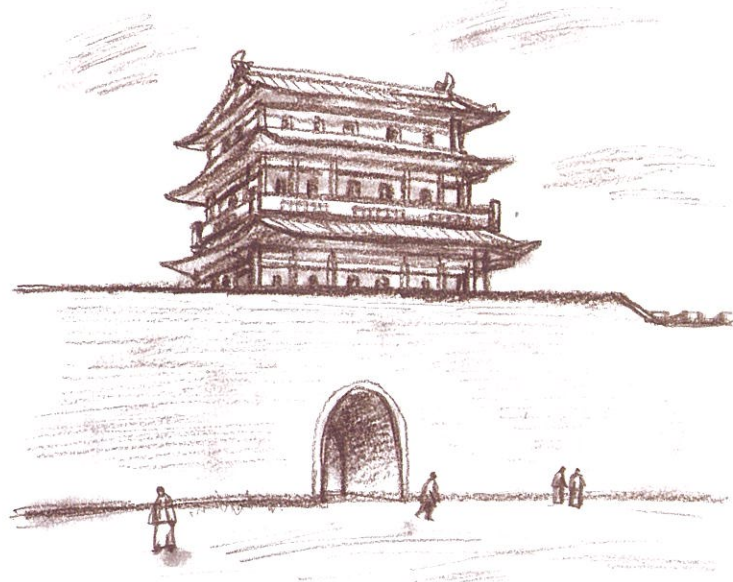


7

小さな出来事



私が田舎から北京へ来て、またたく間に六年になる。その間、耳に聞き目に見た国家の大事なるものは、数えてみればそうとうあった。だが私の心に全て何の痕跡も残していない。もしその影響を指摘せよと言われたら、せいぜい私の癩癧を募らせたただけだ——もつと率直に言うと、日増しに私を人間不信に陥らせたただだと答えるほかない。

ただ一つの小さな出来事だけが、私にとって意義があり、私を癩癧から引き離してくれる。今でも私はそれが忘れられない。

それは民国六年の冬、ひどい北風が吹きまくっている日のことである。

私は生活の必要から、朝早く外出しなければならなかった。ほとんど人つ子一人歩いていなかった。ようやく人

力車を一台捕まえ、S門まで行くように命じた。しばらくすると、北風が幾らか小やみになった。路上のほこりはすっかり吹き清められて、何もない大道だけが残り、車はいっそうスピードを増した。やがて、S門に行き着こうとする頃、不意に車のかじ棒に人が引掛かって、ゆっくり倒れた。倒れたのは女だった。髪は白髪交じり、服はおんぼろだ。いきなり歩道から飛び出て、車の前を横切ろうとしたのだ。

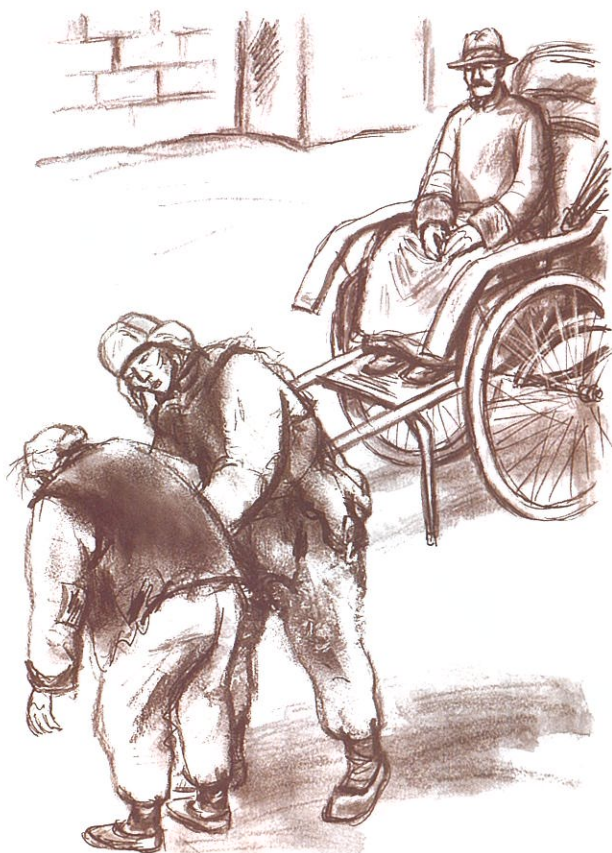
車夫はかじを切って道を空けたが、綿のはみ出た袖なしの上着にホックが掛けてなかったために、微風にあおられて広がり、それがかじ棒にかぶさったのだ。

幸い車夫が早く車を止めたからよかつたものの、そうでなかったら、ひっくり返って頭を割るほどの事故になったかもしれない。

女は地面に伏したままだし、車夫も足を止めてしまった。私は、その老婆がけがしたとは思えなかつたし、他に誰も見ていないのだから、車夫のことをおせっかいなやつだと思った。自分からいざこざを起こし、そのうえ私にも迷惑がかかる。

そこで私は、
「なんともないよ。やってくれ。」
と言った。

しかし車夫は、耳も貸さずに——聞こえなかつたのかもしれないが——かじ棒を下ろして、老婆をゆっくり助け起こし、腕を支えて立たせてやった。そして尋ねた。



魯迅 著
竹内好 訳
小林与志 絵

*癩癧
神経質で激しやすい性格。
かんしゃく。

*民国六年
一九一七年を指す。「民国」
は、中国の国曆。

*S門
実名は宣武門。中国・北京
の紫禁城を囲んでいた城門
の一つ。

「どうしたね。」

「けがしたんだよ。」

私は思った。おまえさんがゆっくり倒れるところを、この目で見たんだぞ。けがなどするものか。
 *狂言
 狂言に決まってる。実に憎いやつだ。車夫も車夫だ。おせっかいの度が過ぎる。それほど事を構えないなら、よし、どうとも勝手にしろ。

ところが車夫は、老婆の言うことを聞くと、少しもためらわずに、その腕を支えたまま、ひと足ひと足歩きたした。

私がけげんに思っただけで前方を見ると、そこは派出所だった。大風の後とて、外は無人だった。車夫は老婆に肩を貸して、その派出所を目ざした。

このときふと、異様な感じが私を捉えた。ほこりまみれの車夫の後ろ姿が急に大きくなった。しかも去るにしたがってますます大きくなり、仰がなければ見えないくらいになった。しかも彼は、私にとつて一種の威圧めいたものにしだいに変わっていった。そしてついに、防寒服に隠されている私の「卑小」を絞り出さんばかりになった。

このとき私の活力は、凍りついたように、車の上で身動きもせず、ものを考えもしなかった。

やがて派出所から巡査が現れたので、ようやく車から降りた。

巡査は私のところへ来て言った。

「ご自分で車を拾ってください。あの車夫は引けなくなりましたから。」

私は反射的に、外套のポケットから銅貨をひとつかみ出して、巡査に渡した。

「これを車夫に……。」

風は全くやんだが、通りはまだひっそりしていた。私は歩きながら考えた。しかし考えが自分に触

20

*外套
 防寒用の上着。オーバーコート。

*「子曰く……。」
 孔子の言行録である「論語」の文章。

れてくるのが自分でも怖かった。さっきのことは別としても、このひとつかみの銅貨は何の意味か。彼への褒美？ 私が車夫を裁ける？ 私は自分に答えられなかった。

この出来事は、今でもよく思い出す。そのため私は、苦痛に耐えて自分のことに考えを向けようと努力することにもなる。

ここ数年の政治も軍事も、私にあつては、子供の頃読んだ「子曰く、詩に云う。」と同様、一つも記憶に残っていない。この小さな出来事だけが、いつも眼底を去りやらず、時には以前に増して鮮明に現れ、私に恥を教え、私に奮起を促し、しかも勇氣と希望を与えてくれるのである。



考えよう

だれ 誰に対しても公平に接するためには、どんな考え方が必要だろう。



- 「なんともないよ。やってくれ。」と言ったとき、「私」は、どんな気持ちだっただろう。
- 「私」は、どうして車夫の後ろ姿が、「急に大きくなった」ように感じたのだろう。

見方を変えて

- 車夫は、どんな思いで老婆を助け起こし、派出所に向かったのだろう。

つなげよう

- これから魯迅の作品「故郷」(国語科)を学ぶときに、今日の学びを思い出そう。